硬膜外麻酔分娩（和痛分娩）　同意書

患者様氏名　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿様

硬膜外麻酔による分娩には以下の様な場合に適応があります

① 耐えられないほどひどい痛みがきたときは、筋肉が硬直して子宮口が広がらず分娩がスムーズに進まないことがあります。麻酔によりリラックスできて分娩がスムーズになることが期待できます。初産婦で痛みに弱く出産に対する恐怖心が非常に強いという方や経産婦で１回目につらい出産をしてトラウマになってしまった方などが対象になります。

② 陣痛や「いきみ」で血圧が異常に上昇し、脳内出血などの重大な障害を招き生命にかかわる可能性があります。循環器系・血管系疾患や妊娠高血圧症など母体に重大な合併症がある方が対象となります。硬膜外麻酔分娩や帝王切開によりリスクを軽減します。

硬膜外麻酔は、硬膜外腔に留置したカテーテル（糸のような細い管）から麻酔薬を注入して、硬膜外から間接的に子宮や産道を支配している脊髄神経を麻酔する方法です。（詳細は説明書を参照）

硬膜外麻酔による分娩（和痛分娩）には以下の様な問題点があります

① 完全に痛みがなくなるわけではありません。国立成育医療センターのアンケートにおいて、多くの方が２０％程度に痛みが軽減し満足であったと回答しています。

② 硬膜外麻酔のためのカテーテルを背中から挿入するときに、血腫を形成することで神経を圧迫する事があります。血腫は自然に吸収され治癒することもありますが、麻痺などの神経症状が続くときは血腫を取り除く手術が必要な場合もあります。

③ お産終了後にカテーテルを抜去しますが、通常、病室でカテーテルを引っ張ることで簡単に抜去できます。稀にカテーテルを簡単に抜去できないため、手術室で麻酔をして抜去しなければならないことがあります。

④ 麻酔薬が直接に脊髄腔に入り、脊髄麻酔になることがあります。硬膜外麻酔と違って直接に脊髄神経を麻酔するため、完全に下半身が麻痺します。麻酔薬を中止するとおおよそ２時間で麻酔効果はなくなり麻痺は解消します。

⑤ 陣痛が弱くなる。そのため分娩時間が長くなること多くなります。陣痛促進剤（オキシトシンなど）を使用するケースが多くなります。また、『いきむ』方向性が自分でつかみにくく、いきみ出す力も弱いので、吸引分娩になる可能性も出てきます。

⑥ 急に血圧が下がる場合があります。極端に血圧が下がった場合、母体から胎児への血流が悪くなり、胎児の血圧、心拍数に影響が出ます。麻酔中は頻回に血圧を測ることになります。また、麻酔中は単独で歩行することは出来ません。

⑦ 尿意がわからない、うまく排尿できないなどの症状が多くの場合あらわれます。麻酔が終了すると元に戻りますが、麻酔中は尿道カテーテルを留置するか、助産師が導尿します。

⑧ 嘔吐により誤嚥性肺炎を起こすことがあります（メンデルソン症候群）。麻酔中は、絶食が望ましいです。

⑨ 薬物ショックやアレルギーショックが起きる可能性もあります。

⑩ 産後１週間程度、ひどい 頭痛がでることがあります。

尚、硬膜外麻酔をすることで帝王切開になる確率はあがることはありません。また、麻酔薬は胎児に悪影響を与えることはありません。硬膜外麻酔の費用は、分娩料金に加えて別途６万円必要となります。

年　　月　　日　説明医師　　印

主治医から以上の説明を受けて、硬膜外麻酔分娩を行うことを同意します。

耳原総合病院　病院長　奥村　伸二　殿

年　　月　　日　本人

配偶者または親族

耳原総合病院　産婦人科